小学校

平成 11 年度

教育研究員研究報告書

特別活動

東京都教育委員会

平成11年度

教 育 研 究 員 名 簿

学級活動低学年分科会

	地 区	学校名	氏 名	備考
1	港	本 村 小	河 野 ま り	
2	北	荒 川 小	川 島 肇 子	◎
3	足 立	梅島第一小	網田由美子	
4	葛 飾	上小松小	立 澤 敬 子	□
5	多 摩	多摩第三小	小 沢 浩 子	

◎ 全体世話人
○ 分科会世話人
□ 分科会副世話人

学級活動中学年分科会

	地 区	学校名	氏 名	備考
1	文 京	誠 之 小	宮 村 福 次	
2	墨 田	第二寺島小	菅 原 秀 道	
3	板 橋	金 沢 小	門 田 陽 子	○
4	青 梅	新 町 小	村 上 雅 子	
5	府 中	矢 崎 小	石 川 真 一	
6	調 布	第 二 小	大 西 洋	□

学級活動高学年分科会

	地 区	学校名	氏 名	備考
1	品 川	台 場 小	吉塚由紀子	□
2	大 田	東 蒲 小	阿 部 幸 乃	○
3	世田谷	京 西 小	野 田 芳 朗	
4	江戸川	篠崎第五小	佐久間貴広	
5	府 中	府中第七	村田美代子	
6	昭 島	拝島第三小	大 友 基 裕	
7	町 田	つくし野小	吉 野 光 代	

児童会活動・学校行事分科会

	地 区	学校名	氏 名	備考
1	中 央	明 石 小	杉本のり子	
2	新 宿	鶴 巻 小	桜 木 浩 行	
3	世田谷	船 橋 小	関 拓 也	□
4	杉 並	和 泉 小	伊 藤 祥 子	
5	練 馬	泉 新 小	原 純 子	
6	国 立	国立第四小	古 谷 賢 司	○

（担当） 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 生 形 章

平成11年度　教育研究員（特別活動）共通研究主題

望ましい集団を通して，

児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

目　　次

Ⅰ　研究主題について …… 2

Ⅱ　研究の概要 …… 3

Ⅲ　みんなでつくるわくわく学級活動
（学級活動低学年分科会） …… 4

Ⅳ　お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動
（学級活動中学年分科会） …… 9

Ⅴ　かかわり合い，認め合い，高まり合う学級活動
（学級活動高学年分科会） …… 14

Ⅵ　一人一人が学校の活動を成り立たせていると実感できる指導の工夫
――児童会活動及び学校行事の特質をふまえて――
（児童会活動・学校行事分科会） …… 19

Ⅶ　研究のまとめ …… 24

〈要約〉

特別活動は，望ましい集団活動を通して，児童一人一人が自分のよさや可能性が発揮できるようにするとともに，友達のよさを認め合える場を確保し，学級生活や学校生活をさらに向上させようとする自主的・実践的な態度を育成することが必要である。そこで本年度は上記の共通研究主題を設定し，児童の側に立つ指導の工夫を探ることにした。

研究の推進に当たっては，４つの分科会を構成した。各分科会では，特別活動実践上の課題を踏まえ，児童の学ぶ姿をとらえながら指導の工夫について研究した。

Ⅰ 研究主題について

研 究 主 題

望ましい集団活動を通して，児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

今日，児童を取り巻く環境は，科学技術の急速な進歩に加え，少子化や核家族化により，地域社会の連帯感や人間関係，仲間意識の希薄化等の現象が進みつつあり，児童の意識にも大きな影響をもたらし，教育上の様々な課題を生じさせている。そのような中，教育の大きな転換期を迎え，教育課程審議会答申等を受けて新学習指導要領が告示された。

新学習指導要領では，21世紀を担う児童が主体的，創造的に生きるためには，自ら考え，判断し行動できる資質や能力を育成し，自ら学び自ら考える教育への転換を図ることが強調されている。つまり自ら課題を見いだし，解決のために自ら思考し，判断し，実行する実践的な態度の育成をめざすことが大切である。さらに，進んで友達と協力し，友達を思いやり，人とのかかわりを重視するとともに体験的な学習や問題解決的な学習にゆとりをもって取り組むことが重要であると考える。また，自ら集団生活をよりよいものにするために互いに，役割を分担し合い，主体的，協力的に活動できるようにすることが大切であり，教科の学習で学んだことを統合し，総合的，発展的に実践する体験的な活動を展開していかなければならない。

以上のことから特別活動部会では，望ましい集団活動を通して一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにするとともに，友達のよさを認め合い，自分の力で学級生活や学校生活の充実と向上を目指そうとする自主的，実践的な態度を育成することが課題であると考え，本研究主題を設定した。そして，本年度は，下記のことに重点をおいて研究を進めることにした。

・児童が問題意識をもって取り組み，一人一人が自分のよさに気付き，創造力を発揮しながら意欲的に活動できるような場の設定や指導・支援，評価の在り方を工夫すること。

・望ましい集団活動を通して，互いのよさを認め合い，高め合っていくことができる人間関係を育成すること。

・一人一人が個性を生かしながら，役割を分担して活動できる場を確保し，児童の自己実現への支援を追究すること。

なお，各分科会では，次のような研究主題を設定し，共通研究主題に迫ることにした。

学級活動低学年分科会…みんなでつくる　わくわく学級活動

学級活動中学年分科会…

お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動

学級活動高学年分科会…かかわり合い，認め合い，高まり合う学級活動

児童会活動・学校行事分科会…

一人一人が学校の活動を成り立たせていると実感できる指導の工夫

――児童会活動及び学校行事の特質をふまえて――

Ⅱ　研究の概要

研究主題　望ましい集団生活を通して、児童の自主的、実践的な態度を育てる指導の工夫

	分科会研究主題・研究仮説	視点
学級活動　低学年	みんなでつくる わくわく学級活動 「みんなでやると楽しい」「またやってみたい」と思う体験活動を積み重ねていけば，学級集団の一員であると気付いて，自分たちでやりたいという思いに支えられた学級活動になるであろう。	1　みんなでやる楽しさを知るための工夫 ①教師の意識づけ ②集団の中での自分の役割 ③認め合う場の設定 2　自分たちでやってみたいと思うための工夫 ①子どもたちの発意，発想を生かした活動の積み重ね ②活動の見通 ③助言の工夫
学級活動　中学年	お互いを認め合い， よりよいクラスをつくろうとする 児童が育つ学級活動 人とかかわりを深める，自主的に話合いや実践ができる，これらの指導の工夫をしていけば，お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つだろう。	1　人とかかわりを深める工夫 ①全員が参加できる。②一人一人の思いを大切にする③自他のよさを認め生かす④話合いの終末の工夫⑤集会・係の工夫 2　自主的に話合いや実践ができる工夫 ①目的の共有化②計画委員会の運営の工夫③自主的に話合いを進める④進んで実践ができる
学級活動　高学年	かかわり合い，認め合い， 高まり合う学級活動 互いにかかわり合う中でよさを認め合い，自分たちの問題を解決する活動を積み重ねていれば，満足感・成就感を味わい，高まり合う集団になるだろう。	1　互いにかかわる中でよさを認め合う工夫 ①学級活動における場の設定 ②学級活動以外の場の設定 2　自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる工夫 ・事前－話合い－事後 ①議題の共有 ②活動の振り返り
児童会活動・学校行事	一人一人が学校の活動を成り立たせていると実感できる指導の工夫 その子なりの「がんばり」をよさとして，互いに分かり合えば，一人一人の存在が大切であると実感できるであろう。	1　その子なりにがんばることができるようにする。 ①めあてを共有する。②役割を明確にする。 2　「がんばり」をつたえる ○自分なりのがんばりに気付き，表現できるようにする。また，表現する場を設定する。 3　互いのよさを分かり合う。

Ⅲ　みんなでつくる　わくわく学級活動

（学級活動低学年分科会）

1　主題設定の理由

低学年の子どもたちの特徴として何にでも興味・関心をもち，いろいろな活動に積極的に取り組むなど，非常に意欲的な生活態度が見られる。また，自己中心的な傾向が強い面もあり，遊びや行動の場面では人間関係が希薄なため，ちょっとしたことでいさかいとなることもある。そして，学校での生活や友人関係などを通して，周囲が自分の思いどおりにいかないことを知り，次第に自己中心的な行動が減少していくのも低学年の発達段階であると考える。低学年の学級会では，子どもたちから，「みんなで遊びたい」と言う声がよく出てくる。どんな遊びをしたいかと聞くと，「ドッジボール」「おにごっこ」「おえかき」「うんてい」「てつぼう」などが出てくる。子どもたちは，「みんなで遊ぶ」ということをどう考えているのだろうか。そこで本分科会では，低学年の子どもたちは，「集団」をどうとらえているか。「みんな」をどう意識しているか実態調査を行った。その結果分かったことは，約半数の子どもたちは，「みんなで遊べる」とは，自分がその遊びをできるかではなく，みんなでできるかを意識していることが分かった。残りの半数の子どもたちは，自分がその遊びをできるかできないかで判断していた。「自分ができないからつまらない」「やり方が分からないからやりたくない」ということから「みんなで遊べない」という気持ちが強いようである。

何事にも興味をもち，いろいろな活動に積極的に取り組む時期に「学級会は，自分たちの時間だ」「自分たちでやってみたい」という思いをもたせたい。そのことが自発的，自治的な態度を育てる基礎となると考える。本分科会では，目指す児童像について次のように考え，指導を工夫することで本主題に迫るものと考える。

目指す児童像
- 学級集団の一員であることを意識し，みんなで協力して活動できる子
- 自分たちでやりたいという気持ちがもてる子

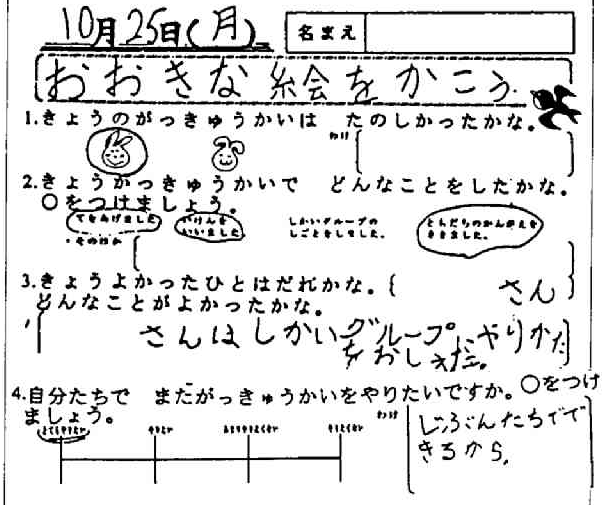
みんなでつくる　わくわく学級活動
- 「みんなで」「つくる」「わくわく」をこのようにとらえてみた。

みんなで	つくる	わくわく
★学級集団・学級の全員でお互いに認め合いながらみんなで活動するという意識をもつこと	★子どもたちが「自分たちでやってみたい」と考え，協力して「自分たちで」活動すること。	★「みんなでつくる」活動が展開された時に子どもたちが感じるもの。満足感，充実感，成就感，次への期待感。

2　研究仮説と研究の視点

《研究仮説》

「みんなでやると楽しい」「またやってみたい」と思う体験活動を積み重ねていけば，学級集団の一員であると気付いて，自分たちでやりたいという思いに支えられた学級活動になるであろう。

《視点１》みんなでやる楽しさを知るための工夫（所属意識）	《視点２》自分たちでやってみたいと思うための工夫（自発的活動）
１－①教師の意識づけ ・子どもたちが全員参加の喜びを感じる話合い活動や集会活動の中で，みんなで力を合わせたり，友達のよいところをみつけたときなどに，教師から全体に広め，みんなでやることの楽しさを知らせる。 １－②集団の中での自分の役割 ・振り返りカードの利用により役割を知る。役割とは，単に司会グループの役だけでなく，友達の意見を聞いたり考えを発表したりということも含まれる。 １－③認め合う場の設定 ・活動の中で友達のよさを認め，自分のよいところを探す。  10月25日(月)　名まえ おおきな糸会をかこう 1.きょうのがっきゅうかいは　たのしかったかな。 2.きょうがっきゅうかいで　どんなことをしたかな。○をつけましょう。 3.きょうよかったひとはだれかな。（　さん） どんなことがよかったかな。 さんはしかいグループでやりかたをおしえた。 4.自分たちで　またがっきゅうかいをやりたいですか。○をつけましょう。 じぶんたちでできるから。	２－①子どもたちの発意，発想を生かした活動の積み重ね ・自分たちですることの大切さ，よさを知らせる。 低学年の児童は，やってみたがりであるが，教師や周りの大人に判断を任せることも多い。そこで，自分たちで考えてやっていくことの大切さ，よさを知らせていく。 ・自発的に活動する場や機会を多く設定する。 学級会の時間は「自分たちで考え，自分たちで決定し，自分たちで活動（実践）していくのだ」と話し，子どもたちだけで活動する時間を確保する。 ただし，人権，安全，金銭，教育課程の変更にかかわることについては，その場で助言する。 ２－②活動の見通し ・話合いや集会の記録を残す。（学級会コーナー） ・教師が話合いの始めに話し合うことを確認し，終わりの時刻を知らせる。 ２－③助言の工夫 ・「先生の話」の観点をはっきりさせ，子どもたちのよかった点を具体的にほめる。

みんなでつくるわくわく学級活動とは

視点１
みんなでやると楽しい。

視点２
自分たちでやってみたい。

みんなが賛成できるには、どうしたらいいかな。

どうしたらいいか、みんなでそうだんしてみよう。

力を合わせてがんばろう。

わからない人には教えてあげよう。

いっしょにこの石をのりこえよう。

時間がかかったけれどうまくいったね。

もう一度考えてみよう。

子どもたちの活動の歩み（道路）
途中で障害物があったり、わき道にそれたりしながらも自分たちの力で前に進んでいく。

教師の助言
子どもたちの活動を見守りながら進み、必要に応じて助言をする。

自分たちが考えたことができてよかった。

○○さんがゆずってくれてよかった。

苦手だったけれどみんなでやったら、楽しかった。

集会を　自分たちの力でできたよ。

みんなで協力したら、うまくいったね。

今度はこうしてみよう。

みんなでなかよくできたね。

もっとやりたいな。

次もみんなで楽しいことをしたいね。

自分たちでまたやろう。

みんなで（所属意識）
「自分はこの学級の一員だ。」「ここにいる友だちはみんな学級の一員だ。」という意識をもつ。
お互い認め合いながら、ここにいるみんなで活動するんだという意識をもつこと。

つくる（自発的活動）
子どもたちが「自分たちでやってみたい」と考え、協力して「自分たちで」活動すること

わくわく
「みんなで」と「つくる」が互いにかかわりあって活動が展開されたときに子どもたちが感じるもの。
満足感・充実感・成就感・期待感。

3　研究内容

実践事例１　議題「全校遠足の遊びを決めよう」（１年）

＜活動の概要＞

【事前の活動】入学してから半年たち学校生活にも慣れてきた。毎年兄弟学級で一日を過ごす全校遠足が，今年は学年学級で午後を過ごすことになった。午後の自由な時間は，どうしようと子どもたちに聞いてみた。子どもたちから，クラスのみんなで遊びたいと言う答えがかえってきた。そこで，学級会の議題にして話し合った。

【話合い活動】話し合うことは，全校遠足で何をして遊ぶか，係分担など。司会の「全校遠足で遊びたいことを発表してください。」の言葉で，一斉に子どもたちは手を挙げて発表した。おにごっこ，縄跳び，リレー，ドッチボール，ポケモンごっこ……が出た。サッカーが出たとき「女の子ができないよ。」と男子の何人かが意見を言った。ポケモンごっこについては，「どんな遊びか。」「外でもできるのか。」など質問が出て，子どもたちの中から「おもしろそうだけど，みんなでできないよ。」という意見が出たので，「みんなでできるものを選ぼう。」ということになり，リレーとドッチボールに決まった。他の遊びをやりたいといっていた子どもたちも，最後は全員納得して決定した。係分担もそれぞれ決めていった。

【事後の活動】当日，用具を持っていく係の子どもは重いリュックを背負い，ボールやリレーバトン持って公園まで一生懸命歩いていた。午後の学級の時間，持って来たなわとびで真ん中の線を引き，外野なしで当たったら帽子の色を変えるなど独自のルールを考えながら行った。リレーも子どもたちでチームに分かれ順番を決めてやった。後の作文を読むと「クラスのみんなとやったリレーが楽しかった。」などの感想が書かれていた。子どもたちの中に，みんなで決めたことをみんなでできたという成就感が得られた。

＜考察＞

視点１　みんなでやる楽しさを知るための工夫

毎回の学級会の中で，みんなでやると楽しい，みんなで考えると良いアイデアが出るということを，助言を通して学級に広めていった。また，子ども同士も振り返りカードの記入により自分の役割について確認できたり，友だちの良いところを探せるようになったりした。子どもたちにとって、教師だけでなく友だちからの良い評価は満足感や成就感へつながった。

視点２　自分たちでやってみたいと思うための工夫

話合い活動や集会の中で，子どもたちの気付きや意欲的な意見を広めた。今回の事例では，ドッチボールやリレーをやり遂げた時，自分たちの力でできたことを，子どもたちに意識づけた。その成就感から次への意欲へつながると考えた。

実践事例２　議題「Ｃ君・Ｘ君がきたよパーティをしよう」（２年）

＜活動の概要＞

【事前の活動】２学期になって，２名の児童が転入した。９月に入り，さっそく司会グループの４人が，給食の時間に「司会相談タイム」（計画委員会の芽）を行った＜視点２－①＞。そこで，相談した内容を「司会相談タイムノート」に記録した。ノートには，４人

の役割と議題「C君がきたよパーティ」（X君は，10月に転入）と書かれていた。帰りの会に，司会グループが議題について話をすると，全員納得して決定した。

【話合い活動】話合いだけで，5回の学級会に及んだ。しかし，この5回の中で，「全員が納得しないとみんなでできないよ。」＜視点1－①＞，「けがをしてオリジナルドッジボールができないD君に，審判をやってもらおう。」＜視点1－②＞，「今までやってきた集会は，時間切れで，プログラム通りいかなかった。今度はそういうことがないように時間をはかろう。時間があまった時のために，予備の遊びを考えよう。」＜視点2－②＞，「C君とX君に1組のことをわかってもらうために，1組の歌とわくわくコールをプログラムに入れよう。」＜視点2－①＞，などを話合うことができた。

【事後の活動】パーティの当日，司会の児童が時間をはかって進めたので，予備のクイズもすることができた。初めて時間内にプログラムをすべて終えることができた。このことは，子どもたちの大きな喜びや自信につながり，「また自分たちでやりたい。」という気持ちをもつことができた。

＜考　察＞

視点1　みんなでやる楽しさを知るための工夫（所属意識）

「2年1組の全員が納得しないと決まらない。」「みんなでやるから楽しいんだ。」「どうしたら納得するのか，みんなで考えよう。」ということを話合いの中で，意識づけてきた。学級集団の中で自分はどんな役割をしてきたのかを振り返りカードに記入し，一人一人が大切な存在であることを知るようにしてきた。また，友達のよかったことをカードに書き，認め合う場の設定をすることにより，自分は，学級の一員であるという意識をもつ子が増えてきている。

視点2　自分たちでやってみたいと思うための工夫（自発的活動）

周りの大人を頼りにしないで，自分たちですることの素晴らしさを知らせる。そして実際に子どもたちで活動する時間を確保することで，子どもたちが知恵を出し合い，少しずつ学級独自の話合いや集会ができるようになってきている。

4　まとめ

(1)　研究の成果

- ＜視点1－③＞カードを活用し，友達のよさを認めたり，自分のよいところを探す場を設定したことにより，「この学級にいてよかった，楽しい」という学級集団（みんな）を意識する芽が育ってきている。
- ＜視点2－②＞活動の見通しをもたせるために，話合いや集会の活動記録を掲示していつでも振り返れるようにした。このことは，今までの経験を生かし，よりよい解決をするために役立てることができた。

(2)　今後の課題

- より適切な振り返りができるようにカードを改善していく。
- 所属意識をもち，自発的活動を促すための肯定的評価について工夫する。
- 集団と個人の高まりや変容を見落とさないよう，教師の記録のとり方を工夫する。

Ⅳ　お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動

（学級活動中学年分科会）

1　主題設定の理由

中学年の児童は，学校生活に慣れて，友達との集団活動の喜びや楽しさもわかり，活発に活動するようになると言われる。たしかに，児童は明るく元気で，まじめに物事に取り組んでいる。しかし，友達を思いやる気持ちや社会性に乏しく，また，自ら進んで活動するよりも指示を待つ傾向が強いように感じられる。

本分科会で行った児童の実態調査の結果は次のようであった。

友達のよい所を見つけることができる	＞	友達によい所をほめてもらったことがある
友達が困っていたら助ける	＞	友達に助けてもらったことがある
クラスは楽しい	＞	クラスのためにがんばっている
話し合うことは楽しい	＞	話合いで自分の考えをみんなに言える
話し合うことは楽しい	≒	話合いで決まったことを実行し，守る
友達に注意されたら直す	＞	友達のよくないところを注意する

この結果から児童のもつ二つの課題が明らかになった。

ひとつは，人とのかかわり合いの面での課題である。友達を認めたり助けたりしたいという気持ちのある児童の数に対し，実際に認められたり助けられたりしたと感じている児童は少ない。これは気持ちを伝える力や受けとめる力が不足しているのが原因ではないかととらえた。

もうひとつは，自主的，実践的な面での課題である。言われたことや決まったことを実行する素直な面がある一方，自分で考え進んで行動することについては十分とは言えない。自分たちでやりとげたという満足感を味合わせ，次の実践への意欲につながる体験をさせることが大切であると考える。

特別活動は望ましい集団活動を特質としている。望ましい集団活動は，お互いを認め合い自分も友達も大切にする豊かな心や，自分たちで課題を見つけ，考え，実践していく力を育てる活動であると考える。楽しい学級，所属意識のもてる学級を目指して，自主的に実践していく児童を育てたい。

そこで本分科会では，中学年における集団活動は学級が中心になることをふまえて，「望ましい集団」を「よりよいクラス」ととらえ，研究主題を「お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動」と設定した。

また，本分科会は，学級活動の話合いにおいて，下記の２つの視点を中心に研究を進めることにした。

・お互いを認め合い，高め合っていくことができる人間関係を育成するために，教師の指導，支援のあり方，場の設定を工夫すること。

・児童が進んで話合いや実践できるように，活動の流れをシステム化（計画，実践，振り返り，評価）すること。

2　研究構想図

主題設定の背景

- 社会的背景（核家族化，少子化，人間関係の希薄な社会，価値観の多様化，科学技術の進歩，学校週５日制）
- 教育の今日的課題（いじめ，不登校，学校の荒れ，社会体験の不足，非行の低年齢化）
- 新教育課程（豊かな人間性や社会性，自ら学び考える力，個性を生かす，特色ある学校づくり）
- 特別活動の基礎（協力してよりよい生活を築こうとする自主的実践的態度）

児童の実態

- 活発，好奇心旺盛
- 明るく，元気
- まじめに取り組む
- 小集団の活動が多い
- 思いはあるが，相手に伝えることは不十分
- 指示を待つ傾向がある

特別活動部会研究主題

望ましい集団活動を通して，児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

中学年分科会研究主題

お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動

「認め合う」とは

①友達の話をよく聞き，理解しようとする。
②友達のよさが分かり，それを生かそうとする。
③友達を助けたり，励ましてあげたりする。
④一人一人がクラスにとって，かけがえのない存在であることを，みんなが自覚する。

「よりよいクラス」とは

①みんなの前で素直に自分が出せる。
②自分たちで問題を出したり，目標をつくることができる。
③問題をみんなの力で工夫して解決できる。
④試行錯誤することも大切なこととして受け入れられる。
⑤目標に向かって，みんなでがんばれる。
⑥みんなのことを考え，行動できる。
⑦みんなで活動することにより，より満足感が得られる。
⑧一人一人が役割をもち，クラスに貢献している。
⑨楽しい体験を次の活動に生かせる。

研究仮説

人とかかわりを深める，自主的に話合いや実践ができる
指導を工夫すれば
お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つだろう

研究の視点

人とかかわりを深める工夫	自主的に話合いや実践ができる工夫
①全員が話合いに参加できる。 ②一人一人の思いや発言を大切にする。 ③自他のよさを生かす ④話合いの終末を工夫する。 ⑤集会，係活動を工夫する。	①話し合うことの目的を共有化する。 ②計画委員会の運営を工夫する。 ③自主的に，話合いを進める。 ④進んで実践ができる。

研究の方法

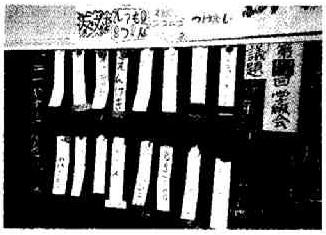
- 実態調査
- 検証授業

研究のまとめ

- 研究結果の考察
- 視点に基づいた仮説の検証
- 研究報告書の作成
- 研究発表

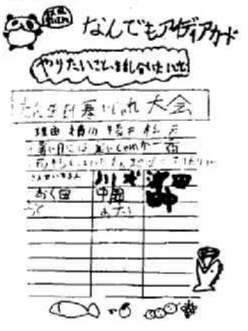
3　研究の視点と手だて，実践事例

(1)　人とかかわりを深める工夫

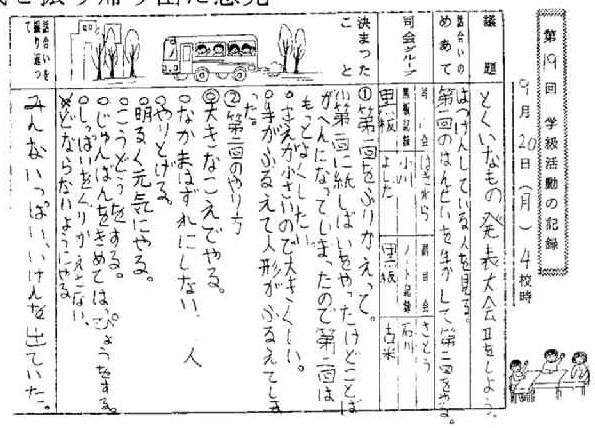
視　　点	手　だ　て　・　実　践　例
①全員が話合いに参加できる。 ・誰もが意見を出しやすい議題選びや，話合いの柱立てをする。 ・必要に応じて小集団の話合いを取り入れる。	**・人とのかかわりを深めやすい議題例と柱立て** クラスのみんなのことを知ろう集会の計画を立てよう ・知りたいことを決める いいところ見つけ集会をしよう 1，やり方はどうするか 2，みつけてどうするか
②一人一人の思いや発言を大切にする。 ・全員の意見をとりあげるような工夫をする。 ・友達の発言に対し，自分の意見表示をする。 ・名前カードを活用する。	・名前カードをはると誰の意見かはっきりする  ・指のマーク
③自他のよさを認め，生かす。 ・少数意見も大切にする。 ・友達の意見をよく聞いて自分の考えをよりよいものにする。 ・全員の意見を大切にし一人一人がクラスの一員であることを大切にした決め方をする。	話合いの仕方（決め方の例） 決める数が決まっている時：1，全員の考えを発表　2，質問　3，「どれにするか」賛成，修正意見　4，決める いくつきめてもいい時：1，一人発表　2，賛成，修正意見　3，一つずつ決めていく　4，確認する ・出された意見は，みんないいものとしてとりあげる。 ・多数決は，なるべくとらず，全員が納得するような方法で決める。
④話合いの終末を工夫する。 ・友達の発言のよかった点を見つけるとともに，自分の発言のよかった点にも気づかせる。 ・教師の助言の観点を明らかにし，児童が自分たちで気付くような助言の仕方を工夫する。 ・スターカードを活用す	**☆スターカードでとりあげた意見** 1，友達の考えをよく知ろうとする態度や意見 ・意味が分からないのでもう一度いってください。 2．友達の考えを受けていった意見 ・2つの考えをまとめて，（　）にしたらどうですか。 ・（　）さんの考えを聞いて，楽しそうなので賛成します。 3．思いやりのある意見 ・みんなで応援するから，代表お願いします。 ・わけは，（　）が喜ぶと思うからです。 ・言い方がきついので，やさしく言ってください。 4，クラス全体を考えた意見

る。	・苦手な人も楽しめるように，工夫しよう。 ・まだ，係になってない人から先にやりたいものを言おう。 ・みんなが楽しめるように，ちゃんと決めよう。	
⑤集会・係活動を工夫する。 ・実態に応じて，人とのかかわりを深めるような内容をとりいれる。	・係例 遊び係　イベント係 レク係　ゲーム係 なやみ相談係	・集会例 得意なもの発表大会 お年寄りと遊ぼう集会

(2)　自主的に話合いや実践ができる工夫

視　　点	手　だ　て　・　実　践　例
①話し合うことの目的を共有化す。 ・学級会（話合い）の目的を理解する。 ・議題コーナーを工夫する。 ・みんなが話し合いたい議題を選ぶ。	・議題カード  ・計画委員会の活動例 ・提案者と司会グループで計画委員会を開く。週単位で流れを決め，自主的に進められるようにする。的確な指導をする。
②計画委員会の運営を工夫する。 ・計画委員会の流れをシステム化する。 ・計画委員会の時間を確保する。 ・話合いを焦点化するために柱立てを工夫する。 ・必要に応じて，事前にアンケートをとったり，資料を提示したりする。	4，計画委員会の活動
③自主的に話合いを進める。 ・座席を工夫する。 ・学級会カードを活用する。 ・話合いの仕方の資料を活用する。 ・スターカードを活用す	

月日・時間	児童の活動	教師の指導・助言，支援
10／8（金） 昼休み 計画委員会	・議題についての話合い 「得意なもの発表会」と「未成年の主張」をいう議題案が出されてたが，先に出された「得意なもの発表会」について話し合ったらどうかということになった。しかし，得意なものがない人もいるのではないか？ということになり，提案者を交えて相談し，「得意なもの」を含めてどんなことを発表し合うとよいかを話し合い，「クラスのみんなを知う発表会」の計画を立てるという議題案をみんなに提案することに決める。	・「みんなは，お互いのどんなことを知りたい？」
10／12(火) 朝の会 全員	・議題決定	・2時間の集会であることを確認する。
10／12(火) 昼休み 計画委員会	・役割分担，提案理由の検討，話合いの柱，時間配分などを話合い，学級会カードに書く。	
10／13(水) 帰りの会 全員	・話合いの柱について説明。意見を考えてくるように呼びかける。	・「お互いのことがよく分かるような集会になるといいね」
10／15(金) 5校時 全員	・学級活動《本時》	
10／15(金) 放課後 計画委員会	・準備，話合いの振り返り。	・よかった点，努力した点をお互いに見つけ合わせる。 ・次に生かせる点を考えさせ，次回の司会グループに助言できるようにさせる。

る。 ・自分たちの力で実践が可能になるところまで話合いをすすめておく。	☆スターカードでとりあげた意見 ・質問ばかりしていると，いつまでたっても決まらないよ。 ・今，何を話しているか，はっきりしましょう。 ・そろそろまとめる意見を言った方がいいと思います。 ・係は前の集会の時をもとにして，決めます。
④進んで実践ができる。 ・話合いの資料や関係資料を掲示する。 ・実践したことをふりかえり，次に生かす。	・前の実践を振り帰り出た意見  第19回 学級活動の記録 9月20日(月) 4校時 議題 とくいなもの発表大会をしよう。 話合いのめあて はっけんしていない人も見つけ。第一回のはんせいを生かして第二回をやる。 司会グループ 男子 小川 はした 黒板記録 男子 ノート記録 石川 古米 決まったこと ①第一回をふりかえって。 ○第一回に紙しばいをやったけどこどもがへんになってしまったので第二回はもっとなくしたい。 ○さえが小さいので大きくしたい。 ○手がふるえて人形がふるえてしまった。 ②第二回のやり方 ○大きなこえでやる。 ○なかまはずれにしない。人 ○やりとげる。 ○明るく元気にやる。 ○こうどうをする。 ○じゅんばんをきめてはっぴょうをする。 ○しっぱいをくりかえさない。 ※必ならないようにする。 話合いを振り返って みんないっぱいいけんを出していた。

4　まとめ

(1)　研究の成果

話合いの中で，人の意見を受けて言う意見や，人の気持ちを考えた思いやりのある意見が多くなった。終末の相互評価でも友達のよいところをみつけられるようになり，人とのかかわりが深まった。また，話合いの進め方が全員に分かるようになり，問題を自主的に自分たちで解決できるようになった。

このように，話合いそのものが，よりよいクラスになっていくことにつながるとともに，話合いで決まる内容もよりよいクラスをめざすものとなり，実践につながっていった。

(2)　研究の課題

①　スターカードでの意見を採り上げ方とより効果的な活用法の工夫

終末の助言で，よい意見をスターカードに書き賞賛している。今回は「人とのかかわりを深める意見」や「自主的に話合いをするための意見」を中心に採り上げた。どの言葉を採り上げるかを今後も吟味していく必要がある。また，ただ掲示していくだけではなく，さらに児童に定着していくような効果的な方法を工夫していく。

②　計画委員会での一人一人の実態に合わせた指導のあり方

個人差に合わせた指導の仕方，児童同士のかかわり方を工夫しながら計画を立てる必要がある。また，実際に出てきた意見を処理していく力を養っていかなければならない。

③　自分たちの生活をより豊かにする議題を見つける力の育て方

よりよいクラスはどういうものかを，その場に応じて，具体的に明らかにしていく中で，議題を見つける力を育てていく必要がある。日頃の授業や生活の中で，問題に気付かせる工夫をしたり，他のクラスや学校の例をあげるなどして，力を育てていくことが重要である。

V　かかわり合い，認め合い，高まり合う学級活動

（学級活動高学年分科会）

1　主題設定の理由

高学年の子どもたちは，一般的に自分が所属している学級をよりよいものにしたいという思いや願いをもち，そのための自発的な活動に興味をもって行動することが多くなる。また，みんなの役に立ちたいという思いももつようになると言われているが，本分科会で話し合った子どもたちの実態からは，次のような子どもたちの側面が見えてきた。

○自分たちで計画し，自発的にやっていきたいという気持ちがある。
○友達のよいところを見つけようとする。
○適切なきっかけや手だてにより，先行経験や既習事項を生かそうとする。

△自分の思いを伝えるのが苦手。（表現方法の不足）
△友だちと深くかかわれない，かかわろうとしない。
△相手にどう思われるか，人の目が気になる。
△他人に厳しいが自分には甘い。
△意欲はあるが，役割が果たせない。
△自発的な活動の実践までは至らないことが多い。

また，子どもたちへの実態調査から，豊かなかかわり合いが不足していることや，自己肯定感がもてないため，人の役に立ちたいという意識が少ないことも考察された。そして，積極的に学級活動を自分たちの時間として考えようという意識もまだ育っていない。それは，自分の意見が言いやすい支持的風土が学級にあるか，学級会で子どもたち一人一人が実現したいと思う議題で話し合っているか，という教師の手だてによるところも大きく影響している。

十分にかかわり合い，互いに認め合う関係を生み出せた子どもたちは，自信をもって自分を表現することができるであろうし，自分たちの問題を自分たちの力で解決していこうとするであろう。そして，さらに深くかかわり合おうとするにちがいない。これらを受け，目指す児童像を次のように設定した。

・自分の思いや考えを表現できる子
・自分のよさを発揮し，相手のよさを認め合うことができる子
・進んで互いの考えを生かすことができる子

以上のことから高学年の学級活動では，互いにかかわり合う中でよさを認め合い，自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねていくことにより，満足感・成就感を味わい，一人一人も学級集団も高まると考え，本研究主題を設定した。

2　研究仮説

互いにかかわり合う中でよさを認め合い，自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねていけば，満足感・成就感を味わい，高まり合う学級集団になるだろう。

3　研究構想図

特別活動の課題

□望ましい集団活動を通して
- 子ども一人一人が自分のよさや可能性を発揮できるようにすること。
- 友達のよさを認め合えるようにすること。
- 自分たちの学級や学校の生活を向上させようとする自主的・実践的態度を育成すること。

□新教育課程への対応

共通研究主題

望ましい集団活動を通して，
児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

社会的背景

- 科学技術の急速な進歩
- 核家族化，少子化
- 価値観の多様化
- 地域社会の連帯感の希薄化
- 豊富すぎる情報
- 高齢化
- 国際化
- 2002年から完全学校週5日制
- 人間関係の希薄化
- 体験を通した活動の不足
- いじめ，不登校，非行の低年齢化

高学年分科会研究主題

かかわり合い，認め合い，高まり合う学級活動

児童の実態

○自分たちで計画し，自発的にやっていきたい気持ちがある。
○友達のよいところを見つけようとする。
○適切なきっかけや手だてにより先行経験や既習事項を生かそうとする。
△友達と深くかかわれない，かかわろうとしない。
△自分の思いを伝えるのが苦手，（表現方法の不足）
△相手にどう思われるか，人の目が気になる。
△他人に厳しいが自分には甘い。
△意識はあるが，役割が果たせない。
△自発的な活動の実践までに至らないことが多い。

目指す児童像

- 自分の思いや考えを表現できる子
- 自分のよさを発揮し，相手のよさを認め合うことのできる子
- 進んで互いの考えを生かすことのできる子

分科会主題について

「かかわり合い，認め合い」とは
- 互いに自分の思いや考えを表現する中で，友達のよさを受け入れること。

「高まり合う」とは
- かかわり合い，認め合う活動を通して，満足感・成就感を味わい，さらに望ましい集団活動を創造すること。

※「望ましい集団活動」とは
- 一人一人の思いや考えを生かし，自分たちのことを自分たちで考え協力して実践できる活動
- かかわりを通して，自分も生き，友達も生きる活動。

研究仮説

互いにかかわり合う中でよさを認め合い，自分たちの力で
自分たちの問題を解決する活動を積み重ねていけば，
満足感・成就感を味わい，高まり合う学級集団になるだろう。

研究の視点

［視点１］　「互いにかかわり合う中でよさを認め合う」工夫
［視点２］　「自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる」工夫

研究の方法

１．児童の実態把握　　２．場の設定　　３．手だての検討　　４．実践や分析の積み重ね

視点１「互いにかかわり合う中でよさを認め合う」工夫

①学級活動における場の設定
- 互いのよさを見つけ，認め合える工夫をする。（よかったさがし，光っている人の発表など）
- 適切な助言をする。（認め合う雰囲気を作り上げるような助言，相互評価，自己評価を育てるための終末の話など。）

②学級活動以外の場の設定
- 様々な場面でのかかわり合いの場面を意図的につくる。（当番活動，教科の学習グループ，生活班など）
- 朝の会，帰りの会などを活用する。（よかったこと，スピーチなど）

視点２「自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる」工夫

事前－話合い－事後（一連の活動としてとらえる）

①議題の共有
- 全員で話し合い，提案理由を十分考えた上で議題を決定する。
- 議題決定から一連の活動の流れの中で，提案理由を意識させる。

②活動の振り返り
- 一連の活動を節目で振り返り，評価することを積み重ねる。（学級会カード，短冊など）
- 活動を振り返ることができる環境を整える。（実践活動で使用したものなどの掲示）

活動時間の確保

児童の変容を把握するための実態調査の実施

仮説の検証

(1)　研究の成果　　(2)　今後の課題

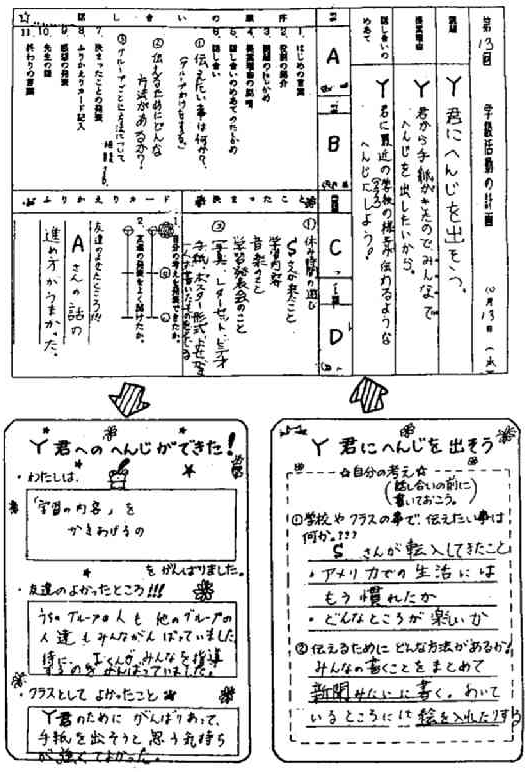
研究のまとめ

(1)　研究報告書の作成　　(2)　研究発表

4　研究内容

実践事例１　議題名「Ｙ君に返事を出そう」（５年）

本議題は，転校していった友達，Ｙ君から届いた手紙を紹介した時に，その場で子どもたちから出てきたものである。Ｙ君のために計画して開いたお別れ会が，自分たちにとっても，よい思い出であり，自分たちで一つのことを成し遂げた貴重な経験になっている。そんな子どもたちが，再び“Ｙ君のためにみんなで”というのはごく自然なことであったと思う。「転校していった友達に知らせたいこと」という内容は，誰もが自分の考えをもちやすいものであるし，それを事前に学級会カードに書くことによって，子どもたちは意欲的に話合い活動に参加できたようである。話合いの結果，伝えたい内容により５グループに分かれて子どもたちは実践活動（返事作り）を始めた。グループ単位の活動は意見が出しやすく，かかわり合いも増し，楽しそうに作業を進める様子が見られた。



完成した返事をグループごとに発表し合った後，一枚の封筒に納めた時には，たいへん満足げであった。また一つ自分たちで成し遂げる経験ができた。

視点１　互いにかかわり合う中でよさを認め合う工夫

話合いや実践活動の終わりに，その時間の成果と友達のよかったところを発表し合う場を設けた。その結果，子どもたちに友達のよさを見つけようとする姿勢が育ってきた。本事例では，グループごとに活動したことにより，十分なかかわり合いができ，友達のよさも見つけやすかったようである。それは自分を振り返る材料にもなったと考える。

自分の考えを表現する場として，朝の会でスピーチを行っている。友達の話に耳を傾け，質問したり感想を述べたりすることによって，かかわり合い，相手のよさを認め合う場としても大切にしているが，本事例の話合いや実践活動においてもそれが生かされていた。

視点２　自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる工夫

“Ｙ君のためにみんなで”の“みんな”はクラス全体であるという意識がグループ活動に入っても持続するように，進行係が活動時間の始めと終わりには，前に出て声をかけてまとめた。学級会カードの他にグループ活動カードを作り，活動の節目で個人またはグループで振り返るようにした。この経験を次に生かせるよう，作業中の写真やグループカードを掲示した。

実践事例２　議題名「６年生３クラスの交流会について２組の意見を決めよう」（６年）

司会グループが議題の検討をし，「卒業までにやりたいこと」のアンケート結果の中から６年生の交流を取り上げた。このアンケートは子どもたちの思いを知り，それをもとに「卒業までにできること」の題材で学級活動(2)を行うために教師がとったものである。

- ６年生全員に「交流会でやりたいもの」のアンケートを実施。
- ３クラス合同話合い①…活動と提案理由の確認をし，内容については，アンケート結果を

見ながらクラスごとに話し合い，後日その意見をもとに６年生全員で話し合うことに決まった。

・クラスの話合い…議題名を決め，学級活動(1)を実施。

・３クラス合同話合い②…３クラスの意見をもとに，内容について話し合い，リレー，宝とり，ドッジボールを行うことになった。

その後は実行委員が中心となって準備活動を行い，３クラス混合のチームをつくった。交流会前にチームごとに練習をしたり，一緒に給食を食べたりしながら交流会への意欲を高めていった。開閉会式，インタビュー，ＢＧＭなどの工夫で交流会を盛り上げた。

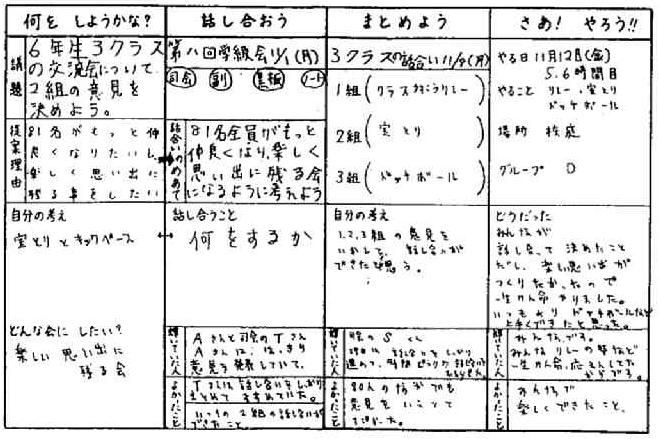
視点１　互いにかかわり合う中でよさを認め合う工夫

話合いや実践活動が終わるごとに，友達のよさを見つけ発表し合う活動を繰り返し行い，友達のよい面を発見することができた。終末の助言では，認め合う雰囲気を作り上げるような具体的な賞賛を心がけた。また，学級活動以外の場の設定として，朝の会で「今一番がんばっていること」「行ってみたいところ」など，自分のことを友達に伝える場や，友達のよい所をみつけ，カードに記入し渡し合う場を継続してもちながら，本事例を実践していった。これらの日常的な活動が本事例の基盤となっている考える。

視点２　自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる工夫

活動が６年生全員に関係するものなので，議題の共有も学年全体に対して行った。合同の集まりをもち，全員で十分に話し合い，共通の理解がもてるようにした。また，学級活動カードを作り，一連の活動を４つに分け節目で振り返ることを繰り返した。

活動が一過性のものにならないように，４月からの活動は，順を追って足跡として掲示し残してある。本実践では，プログラム，チームメンバー表，写真を掲示した。



実践事例３　題材名「連合運動会の目標をもとう」（６年）

２学期に入ってから，区の連合運動会の取り組みが始まった。個人種目と共にクラス種目（長なわ）がある連合運動会。児童一人一人が「希望や目標をもって生きる態度の形成」を願って，学級活動(2)として授業を行った。まず学年・クラス目標を決め，本時では，それを確認した上で，個人として具体的にどう取り組み，どう頑張るかを友達の考えも参考にしながら自分のめあてを考えることを求めた。連合運動会参加への意識を高めるために，「取り組みカード」は一連の活動を３つに分け，節目で記入しながら振り返った。

視点１　互いにかかわり合う中でよさを認め合う工夫

本時では，児童が書いた日記や作文から，頑張りと成長を教師の側からいくつも紹介していった。多くの子が知らないような内容もあり，友達のいいところを新しく発見したという子もいた。多様なよさを教師が提示していく中で，児童は見方を学ぶことにもなる。また，「取り組みカード」に友達やクラスの頑張りと成長を書き，発表する中で，よさを認め合っていった。学級活動以外の場では，「１分間パフォーマンスタイム」や学期に１，２回行う「友達や自分

のいいところを見つけ」，学級全員で作る月刊雑誌などを通して，友達のいいところを積極的に見つけ，学び合っている。

視点２　自分たちの力で自分たちの問題を解決する活動を積み重ねる工夫

「取り組みカード」は，節目ごとに自分（たち）の目標を振り返った。そして，互いに発表したり掲示したりすることで，自分たちの成長を讃え合ったり，課題を確認したりしていった。その後，この取り組みを通して学んだことを生かし，卒業に向かって更にいい思い出を創っていくためにはどうしたらいいかを考えていった。

5　まとめ

(1)　研究の成果

視点１について　・学級活動ではもちろんのこと（友達のよかったさがしなど），学級活動以外の場でも，かかわりを深めることができるような活動を意識的に行うことで，一人一人がよさを発揮し，友達のよさを認め合うことができるようになってきた。

視点２について　・議題案を掲示することや，計画委員会を中心に全員で議題決定を行い，議題及び提案理由の共有化を図ることにより，学級の問題を自分たちの問題としてとらえることができるようになってきた。

・活動の節目で振り返りの場を確保することにより，議題決定から事後までを一連の活動としてとらえ，自分たちで解決できたという成就感・満足感を味わい，次の活動への意欲をもつことができた。さらに，自分たちの課題にも気付くようになってきた。

●視点１，視点２の活動を積み重ねることにより，一人一人が高まり合い，さらには学級集団としても高まることができた。

(2)　今後の課題

・話合い活動を自分たちの問題としてとらえさせるためにも，計画委員会をもつ時間の確保ができるような工夫をしていく必要がある。

・児童の活動意欲を喚起し，次の活動へつなげるためにも，終末の助言によるよさの評価や次への課題提示などについては，さらに研究を深める必要がある。

Ⅳ　一人一人が学校の活動を成り立たせていると実感できる指導の工夫
── 児童会活動及び学校行事の特質をふまえて ──

（児童会活動・学校行事分科会）

1　主題設定の理由

児童会活動や学校行事の活動はともに学級，学年または全校の児童にまで広がる集団活動である。いずれも，その集団の中で自分の役割をしっかりと果たし，満足感を得ることにより，集団の一員としての所属感や連帯感が生まれ，集団の一員としての自覚が深まっていき，それぞれの活動のねらいが達成できるものと考える。

児童の実態を見ると，委員会等の与えられた仕事をまじめにやり遂げたり，集会・行事には意欲的に取り組んだりといったよさが見られる。しかし，本分科会で行った実態調査からは，「自分自身のよさやがんばりを認められていると感じている児童が少ない」「みんなの役に立っていると感じている児童が少ない」「よさを認め合ったりそれを表現したりすることが苦手であるが，内心は認められたいと願っている」という課題が浮かび上がった。

児童は皆、教師や友達に「自分のよさを認められたい」「みんなの役に立ちたい」という願いをもっている。しかし，自分のよさに気付いていなかったり，がんばっていてもそれを表現することができず，友達に認められていないと感じていたりする児童が多い。「自分は認められている」「役に立った」という実感があってこそ活動が喜びとなり、次の活動の、意欲につながるであろう。そこで本分科会では，目指す児童像を次のように設定した。

> ○みんなの役に立ったと実感できる児童
> ○よさを認め合い，それを進んで表現しようとする児童
> ○一つの取り組みで得たことを，次の活動に生かそうとする児童

以上のことから，一人一人が自分にできること，自分なりにがんばっている姿をよさとして分かり合えば，今まで気付かなかった新しい自分を発見し，いつも友だちに「認められている」「役に立っている」という意識や存在感が高められ，一人一人存在が大切であるという実感をもたせることができるであろうと考え，本主題を設定した。

2　研究仮説と研究の視点

活動のめあてに向かって，その子なりのめあてをもち，少しでも踏み出そうとすることを「がんばり」ととらえた。そこで，

> その子なりの「がんばり」をよさとして，互いに分かり合えば，一人一人の存在が大切であると実感できるであろう。

という研究仮説を設定した。

	視点1	視点2
	その子なりにがんばることができるようにする。	「がんばり」を伝える。
児童会活動	○子どもの発想を生かしためあてを共有する。 ・興味・関心をもつような活動を工夫する。 ・めあてをみんなで考える。 ・めあてをふまえた活動名を子どもの発想を生かしてつくる。 ○その子なりの役割を明確にする。 ・その子なりの役割を知らせる工夫をする。 ・全員が活躍できる役割をつくる。 ・活動の見通しをもたせる工夫をする。	○自分なりのがんばりに気付き，表現できるようにする。 ・一人一人の思い，がんばりを聞き出す工夫をする。 ・自己アピールできる場を設定する。 ・プレゼンテーションを工夫する。 ・わかりやすい資料づくり，メディアを有効活用する。
学校行事	○行事の意義をふまえためあてを共有する。 ・行事のめあてをふまえた活動名を子どもの発想を生かしてつくる。 ・めあてを知らせる工夫をする。 ○児童に任せる部分を明確にし、役割を分担する。 ・その子なりの役割を知らせる工夫をする。 ・全員が活躍できる役割をつくる。	○自分なりのがんばりを表現する場を設定する。 ・一人一人の思い，がんばりを聞き出す工夫をする。 ・自己アピールできる場を設定する。 ・プレゼンテーションを工夫する。
視点3　互いのよさを分かり合う。		
○その子なりのよさを認める評価観をもつ。 ・その子なりのがんばりをとらえられる評価を工夫する。 ・互いのよさを認め合う場を工夫する。		

3　研究構想図

特別活動の課題

○望ましい集団活動を通して，
- 児童一人一人が，自分のよさや可能性を発揮できるようにする。
- 友だちのよさを認め合えるようにする。
- 自分たちの学級や学校の生活を向上させようとする自主的・実践的な態度

○学校週５日制度への対応

共通研究主題

望ましい集団活動を通して，児童の自主的・実践的な態度を育てる指導の工夫

児童会活動・学校行事分科会研究主題

「一人一人が学校の活動を成り立たせていると実感できる指導の工夫」
―児童会活動及び学校行事の特質をふまえて―

研究仮説

その子なりの「がんばり」をよさとして，互いに分かり合えれば，一人一人の存在が大切であると実感できるであろう。

社会的背景

○科学技術の急速な進歩
○核家族化，少子化
○価値観の多様化
○地域社会の連帯感の希薄化
○人間関係の希薄化
○体験を通した活動の不足
○いじめ，不登校，非行の低年齢化，社会性の欠如

研究の視点・てだて

	視　点　1	視　点　2
	その子なりにがんばることができるようにする。	「がんばり」を伝える。
児童会活動	○子どもの発想を生かしためあてを共有する。 ○その子なりの役割を明確にする。	○自分なりのがんばりに気付き，表現できるようにする。
学校行事	○行事の意義をふまえためあてを共有する。 ○児童に任せる部分を明確にした役割を分担する。	○自分なりのがんばりを表現する場を設定する。
視点３　互いのよさを分かり合う。		
○その子なりのよさを認める評価観をもつ。		

児童の実態

○児童会活動や学校行事の活動に意欲的に取り組んでいる。
○自分の仕事にまじめに取り組む。
○自分自身のよさやがんばりを認められている感じている児童が少ない。
○みんなの役に立っていると感じている児童が少ない。
○よさを認め合ったりそれを表現したりすることが苦手であるが，内心は認められたいと願っている。

目指す児童像

○みんなの役に立ったと実感できる児童
○よさを認め合い，それを進んで表現しようとする児童
○一つの取り組みで得たことを次の活動に生かそうとする児童

仮説の検証

○研究の成果
○今後の課題

研究のまとめ

○研究報告の作成
○研究発表

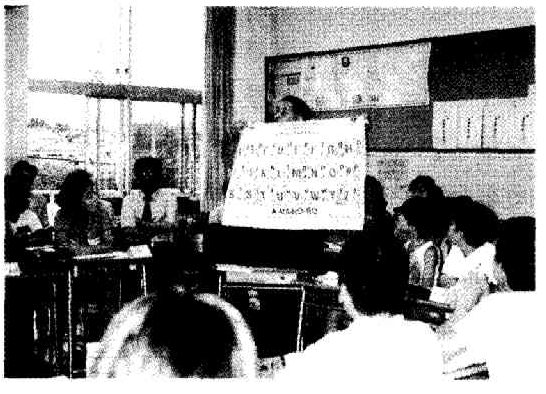
4　実践事例

事例１　活動名　「○○小　みんなの声を聞こう　そして，世界の声を聞こう」

～バージョンアップ　ユニセフ募金～

【事前の活動】

本校では，全委員会が２期制であり，また，特別委員会という主な各行事独自の児童実行委員会がある。そこで，代表委員会に所属する児童自らがより自主的・実践的に活動しやすいように１年間のめあてを決め，全校の声を集めた議題について話し合うようにした。その中の一つ，「グリーンマーク集めで届くノートをどうするか」の議題を話し合っているうちに，ユニセフへ届けようということになった。しかし，物資を受け取ってくれるのかどうかがわからず，児童が資料を調べたり，電話で直接ユニセフへ問い合わせたりすることを始めた。（７月視点１）



【事中の活動】

調べたり問い合わせたりした結果，物資は受け取ってくれないことがわかった。しかし，児童はユニセフ協会が子どもの質問に親切に答えてくれたことに感激し，後から届くノートのことより，まずユニセフについて調べてみようということになった。自分たちがユニセフについて知らなくては，募金の呼びかけを安易にはできないと気付いた。いろいろな資料を送ってもらい，テーマごとにグループ調べを始めると疑問も出始め，児童は手紙で代表委員会内発表会にユニセフ協会の方に来てほしいことをお願いした。また，夏休み中，ユニセフリーダー講習会にもメンバー代表者が参加した。（７，８月　視点１）

発表会にはユニセフ協会の方にゲストティーチャーとして来てもらいユニセフについてのわからないことを質問したり，トルコ地震への対応や世界の子どもの様子を教えてもらったりした。また，実物の「SCHOOL IN A BOX」も見せてもらい児童の関心が大いに高まった。そして，全校にユニセフについて知ってもらうためにどうしたらいいか考えを出し合い，４つの方法にしぼった。台湾の地震が起こったこともあって，すぐにそのうちの３つの方法（①朝会でのユニセフについての紹介，②ポスター・ボード，③ユニセフビデオを見まくろう集会）で校内に知らせ一週間後に募金活動を実施した。（９月　視点２，３）

【事後の活動】

もうひとつの方法は，自分たちの活動をより多くの人に知ってもらいたいという思いから，学芸会幕間でユニセフコマーシャルを行った。家族や地域の人にもユニセフ募金活動について知ってもらうよい機会となった。（12月　視点１，２，３）

事例２　健康安全・体育的行事「運動会・応援団」

【事前の活動】

顔合わせでは，まず応援団の意義を知らせ，一人一人が紅白の代表となって運動会を盛り上げるのだと言う意識付けをした。次に紅白別に応援団のめあてを話し合わせた。赤組が『ガッツだ燃えろよ応援団』，白組が『最後まで全力で応援して白組優勝』に決まった。また，経験者の話

などを交え，活動に概要を知らせ，児童に任せる部分を明確にし，役割分担をした。そして自分のめあてをカードに記入し，応援団ボードに掲示し，全校にも知らせるようにした。（視点１）

【事中の活動】

練習は主に紅白別に行い，「堂々とした態度で行うこと」「大きな声，動作で行う」等の基本的な事は教師が指導したが，基本の応援の仕方，各団のオリジナル応援の手拍子の動作や，シュプレヒコール，勝ちどきのセリフなどは児童に任せ，応援団長を中心に自分たちで工夫するようにした。（視点１）

また，練習中紅白互いにできばえを見せ合い，意見交換をしたり，練習の後で必ず反省会を行い，「昨日より声が出ていた」「動作が大きくなった」など自分なりのがんばりをアピールしたり，互いのよさを認め合う場を設けて励まし合った。（視点２・３）

全体練習では団長から各団のスローガンを知らせ手拍子のタイミング，かけ声のかけ方など全体に呼びかけ，協力を求めた。応援団自らが全校に呼びかける事により，運動会を盛り上げるのは，全校の一人一人であるという意識をもたせるようにした。（視点１）

また朝練習は校庭で行うようにし，見物の児童たちに一緒にやるよう呼びかけるなど，応援に対する関心をもたせ，自分たちの応援をアピールする場になった。（視点２）

当日は，応援合戦，午前最後の低学年リレーの前，午後最後の高学年リレーの前に，基本，オリジナル応援を行い，場を盛り上げた。さらに，徒競走等の時には，進んで応援席の児童に呼びかけ，手拍子，声出しを求める場面も見られるなどがんばって活動していた。

【事後の活動】

運動会終了後，担当の教師から一人一人に賞賛の言葉を贈った。また，振り返りカードに自分の反省と来年の応援団に向けてメッセージを書いて掲示し，来年度の活動に生かすようにした。

5　まとめ

＜研究の成果＞

・活動に対して，めあてを共有できるような工夫によって，仲間意識が高まり，より意欲的に取り組めるようになった。

・自分なりのがんばりやよさを伝える工夫によって，互いによく知ることができ，自分のがんばりが伝わり，友達のよさに気付くようになった。

・様々な観点から児童を見ることによって，教師がその子なりのよさやがんばりに気付き，児童の意欲を高めるような指導ができるようになった。

＜今後の課題＞

児童一人一人のがんばりやよさを見すごしてしまわないように，教師のより有効で的確な一人一人のがんばりやよさのとらえ方の工夫が求められる。さらに，教師の評価にとどまらず，児童相互においても，多様な観点で認めあえるような指導の工夫や，児童に成就感・満足感を与える助言の工夫も合わせて考えていきたい。

また，自主的・実践的態度を育てるために，児童会活動と学校行事の特質をふまえて一層の連携を深めていく必要性があるのではないだろうか。今後，事例を積み重ね，改善点を探っていきたい。

Ⅶ　研究のまとめ

特別活動部　共通研究主題

望ましい集団活動を通して、児童の自主的，実践的な態度を育てる指導の工夫

学級活動低学年分科会

「みんなでつくる
わくわく学級活動」

みんなでやるから楽しい。一人一人が大切な存在であることを知るようにしてきた。学級集団の中で自分の役割を振り返ったり，友だちのよかったことを認め合う場を設定したりすることで，自分は学級の一員であるという意識をもつ子が増えてきた。自分たちですることのすばらしさを知らせ、活動する時間を確保することで、子どもたちが知恵を出し合い，少しずつ学級独自の話合いや集会ができるようになってきている。

「この学級にいてよかった楽しい」という学級集団を意識する芽が育ってきた。

学級活動中学年分科会

「お互いを認め合い，よりよいクラスをつくろうとする児童が育つ学級活動」

話合いの中で，人の意見を受けていう意見や，人の気持ちを考えた思いやりのある意見が多くなった。終末の相互評価でも友達のよいところをみつけられるようになり，人とのかかわりが深まった。また話合いの進め方が全員に分かるようになり，自主的に問題を自分たちで解決できるようになった。

このように，話合いが，よりよいものになっていくとともに，話合いで決まる内容もよりよいクラスをめざすものとなり，実践につながっていった。

学級活動高学年分科会

「かかわり合い，認め合い
高まり合う学級活動」

・学級活動では勿論のこと学級活動以外の場でも，かかわりを深めることができるような活動を意識的に行うことで，一人一人が自分の存在，友達の存在を受け入れ，認め合う中で支持的風土が醸成された。

・議題ボードなどの活用により，学級の問題を自分たちの問題としてとらえ，さらに計画委員会を中心に，議題決定を全員で行う作業の繰り返しにより，議題の共有化を図り，自分たちの問題を解決する意欲をもつことができた。そして，学級会カードを工夫することにより議題決定後からの一連の活動の流れの中で，常に提案理由を意識して取り組むことができるようになった。

児童会活動・学校行事分科会

「一人一人が学校の活動を成り立たせていると
実感できる指導の工夫」－児童会活動及び学校行事の特質をふまえて－

活動に対してのめあてを共有できるように工夫することによって，仲間意識が高まり，より意欲的に取り組めるようになった。また，異学年グループの活動を取り入れることによって，互いをよく知ることができ，自分のがんばりが伝わるとともに友達のよさにも気付くようになった。さらに，教師側も様々な観点からその子なりのよさやがんばりに気付き，意欲を高めるような指導ができるようになった。